

やうな所がない譯ではない。元來此種の歴史地理的考證を中心とする論文に於いて其理解を困難ならしめるものは論理や内容の深遠によるのではなく、記述の複雑の結果に依るのである。されば所論の本流に直接關係のないものはなる可く註文中に入れて欲しかった。猶亦理解に便するが爲に附圖を作り、更に同地名表の如きもあつたならと思ふ。例へば

赤土 室利佛齊 金(舍の誤) 利毗逝 狼牙須 狼牙
脩 郎迦戌 凌牙斯 凌牙斯加 龍牙犀角 龍牙 龍牙 龍牙
cogam 龍牙犀角

といふが如くに。此他引用の漢文なども句讀點を付ける親切が欲しかつた。二十一頁の冊府元龜よりの引用文、即ち貞觀五年林邑獻火珠……云得羅利國波利國遣使隨林邑使獻方物の如きは、この儘では讀み得まい。試みに原本に當るならば、

五年(貞觀四年五月の誤)。林邑獻火珠。狀如水晶。日正午時。以珠承景。取艾衣之。即火見云。得於羅利國。波利國遣使隨林邑使獻方物。

と讀む可きかと思ふ。是に依ると單に氏の引用する記事が難讀であるのみならず、元龜の異本にでも依つたものではあるまいかと疑はれる程誤字脱字がある。其前の唐書所引の記事に就いて見ても通行本には與婆利羅利二國使者偕來。となつて居り、矢張二字不足して居る。偶然に原文に當つた二記事が兩者共に斯の如しとすると、他の引用文に於ても、それが稍々讀み難いものと、直ぐに無用な疑ひが掛け度くなる。此他校正不充分的爲に生じた誤植

が屢々目に付く。勿論此等のことは何れも些細のことで、所論の價值をいさゝかも損ずるものでないのではあるが。妄評多謝。(菊版 三八三頁 東京神田神保町二 巖松堂書店發賣) (小野)

Okurt Freysig; Die Meister der entwickelnden
Geschichtsforschung. Breslau, 1936.

著者クルト・フライジヒは、現在ベルリンの教授、古くは「近世文化史」三卷(一九〇〇—一九〇一)や「世界史の段階構造とその諸法則」(一九〇五)によつて、また最近では「史的生成論」(一九二五)や「ドイツ精神とその特質について」(一九三二)等多数の述作によつて、我國の史學界にも既に廣く紹介済みの人であるから、歴史把握に於ける彼の立場なり、十九世紀以來の獨逸史學思想の歴史の線の上に於いて考へらるべき彼の位置づけなりについて、今更に言葉を使すにも及ぶまい。

さて、本書は、題して「發展の歴史研究の巨匠たち」と稱せられる。こゝに云ふ「發展の歴史研究」とは、著者に依れば、個々の歴史事實そのものから出發するのではなく、長き事實の經過から出發し、且つ時間を踰えてそれを相互に統一に於いて結びつけ、何年、何十年を一まとめにして鎖に連結し、或は更に進んで何世紀、何十世紀の連綿たる連續からまとまつた系列を形づくらんとする、史的對象の取扱ひ方」を意味するものであつて、それは、單に「記述的な歴史敘述との對立に於いて」考へられるものである。従つて「記述的な歴史研究が確かな事實、即ち誤謬を拂ひ落された傳

承の再現を以て満足せんとするに反して、發展的歴史研究の眞骨頂は個々の事實の聯關を探索するところにある（以上、Vornortの三より引用）。

それ故、讀者は、ランケの云ふやうな「Fortschritt」の對立概念としての「Entwicklung」の思想を以て、本書の成立を考へてはならない。本書に見出されるものは、その根柢に於いて生物學的な有機體説の思想に基礎づけられてゐるところの、歴史的の世界を以て單に連續の世界となす片面的な歴史把握の態度であり、これに纏りを與へるものは、自然科學的な法則概念との類似に於いて考へられる發展段階の思想乃至は圖式主義的な考察方法である。早く云へば、當て「世界史の段階構造とその諸法則」を説いたブライジヒが、こゝに新しい素材を取上げつゝ、再び姿を現してゐるにすぎない。

著者の此のやうな基本的立場が、その取上げる對象を制約すると云ふことは、勿論云ふまでもない。

本書が、その歴史思想を論述せんとする人々は、洋の東西を問はず、古くは古代ギリシアの昔から、近くは十八世紀ドイツに至るまでの偉大な思想家として擇び出された「巨匠たち」なのであるが、これらの人々の多くが、その歴史的なものの見方に於いて——勿論、思想的に本質的な相異をなしてゐることは斷るまでもないが——多くの場合、なんらかの意味で、またなんらかの點で、著者自身の歴史觀と一脈の相通するものを有つてゐた人々であることは、本書を細く者の容易に看取り得るところである。殊に、

十四世紀のアラビア人イブン・クハルズンや十七・八世紀のナポリの人ジョヴァンニ・パティスタ・ヴィコ等の歴史思想に、本書が何故強く力點を置いてゐるか、また本書六〇—六四頁に於いて、モンテスキューの先蹤としてのマキアヴェルリ、そして此の兩者の中間に立つジャン・ボダン、更にマキアヴェルリの先蹤としてのティツス・リヴィウス、リヴィウスの先蹤としてのポリュビオス等が、何故特に取上げられ、そして何故彼等の相互の間の思想的脈絡が辿つて行かれてゐるのであるか、——このやうなことは、ブライジヒ自身の立場の根柢を知つてゐる人にとつては、むしろ微笑ましい事柄でさへあるであらう。しかも著者ブライジヒは、今吾々が見たやうな彼一流の立場に於いて、これらの人々の歴史思想を紹介し、解釋することによつて、自己の史學思想を展開してゆくのであるから、本書は、云はゞ「巨匠」と云ふすぐれた鏡に寫し出されたブライジヒ自身の見事な映像に他ならない。

ところで、こゝに擇び出された十人の「巨匠たち」の中で、ヴィコ及び四人のフランス人即ちモンテスキュー、ヴォルテール、テュルゴー、コンドルセの合せて五人の偉大な思想家は、著者によれば「發展的歴史研究」の「最初の完成者」として考へられる。これを時代的に云へば、十七世紀の後半から十八世紀の後半に於いて生きた人々であり、これを歴史思潮の上から見れば、普通に、啓蒙期史學を代表すると考へられてゐる人々である。本書の第一部「發展思想の成立とその最初の完成」は、その後半を、専らこれらの人々の歴史思想の紹介と批判とに捧げてゐる（四一—一三七頁）。

しかし、これらの人々が、その思想的祖先を有たなかつた譯ではない。かゝるものとして、ブライジヒは二人の人を擧げる。アリステレスとイブン・クハルツンと。そこで、本書の第一部の前半(一〇—四〇頁)は、此の二人の「偉大な豫感者」の思想の中に、著者「流」の「發展思想」を跡づけることに宛てられてゐる。尙、これに先立つて、本書の冒頭には「序論、歴史敘述の誕生」と云ふ一節が置かれてゐるが、これに就いては、別に事新しく云ふべきこともない。

續いて、本書の第二部に入ると、今度はやゝ趣を變へて、ドイツ人の歴史思想が説かれる。これは、「十八世紀のドイツ人の偉大な歴史著作」と題されてゐて、こゝにはヴィンケルマン、ユスツス・メーゼル、そして最後にヘルデルが取上げられてゐる(一三八—二六七頁)。勿論ヴィンケルマンに於いてはその「古代美術史」を、メーゼルの於いてはその「オスナブリュック史」を、ヘルデルに於いてはその「歴史哲學の理念」を中心に、此の三人のドイツ人の研究方法なり、著作内容より、歴史思想なりが、著者独自の見解の下に、紹介され、解釋され、批評されてゐるのである。

以上は、本書の内容の大體とその構成の輪廓を簡単に傳へたにすぎないが、要するに本書は、十八世紀の佛・獨兩國の史學思想を代表する七人の思想家を中心とし、之に異色ある一人の伊太利人を加へ、更に彼等に配するに古代より一人のギリシヤ人、中世より一人のアラビヤ人を以てして、これらの人々の歴史思想を著者獨得の立場に於いて把へ、その中に著者の所謂「發展の歴史

思想」の成立と完成とを古く時代を遡つて跡づけることによつて、著者自身の史學理論を主張せんとする一つの試論に他ならない。本書の取扱ふところは、十九世紀獨逸史學に及ばんとして果さず、僅かに啓蒙史學よりロマンティク史學への推移を暗示するヘルデルの思想を説くことに於いて、一應の完結を與へてゐるにすぎない。著者は、「本書を以て、歴史敘述の歴史を包括すべき廣汎な課題にも應へん」(Vorwort, S. vi)とする抱負を洩らしてゐるのであるが、かゝる觀點に於いて本書を省るとき、恰も「ヘルデルがその畢生の偉大な歴史著作を中絶し、これを一つのトルソーのまゝに置いた」(二六四頁)如く、ブライジヒも亦、本書をかゝるものとして未完成に終らしめてゐると云はざるを得ないであらう。本書Vorwort 結尾の言葉によれば、著者は今後更に科學史的及び科學理論的なアルバイトを公にすることによつて、この缺を蔽はんとする企圖を有してゐるやうである。恐らくは、本書は、同じ著者によつて近く公刊されると云ふ「發展思想の新形成」並びに「發展の歴史研究の理論」の二書と共に、著者の理論體系を構成する一つの三部作を形づくるものであらう。すでに一九二六年に還曆を迎へた此の老大家が、近年續々と大作を發表し、殊に近く自己の「Grundlagen von Geisteswissenschaften」を世に公にせんとする、その熱意と努力に對して、吾々は敬意の念を禁ずることが出来ない。(Verlag von M. & H. Marcus, xx u. 267 Seiten, brosch. RM. 10.—) [中山]